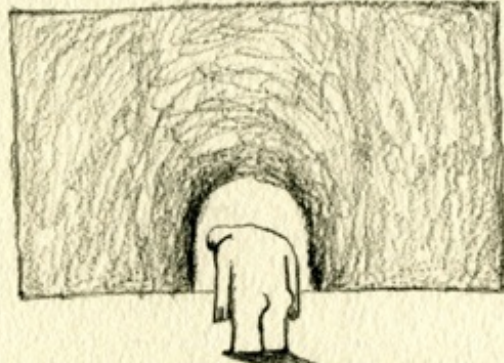
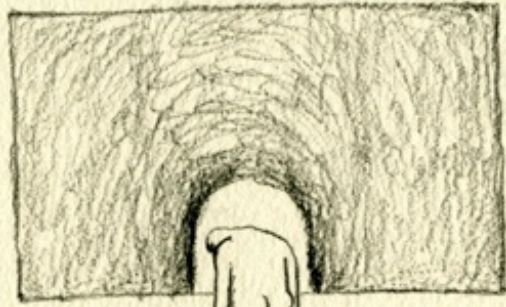


だれにだってそんな日はあるのさ。



うみの所に行きな。

だれにだてそんな日はあるのさ。



うみの所に行きな。



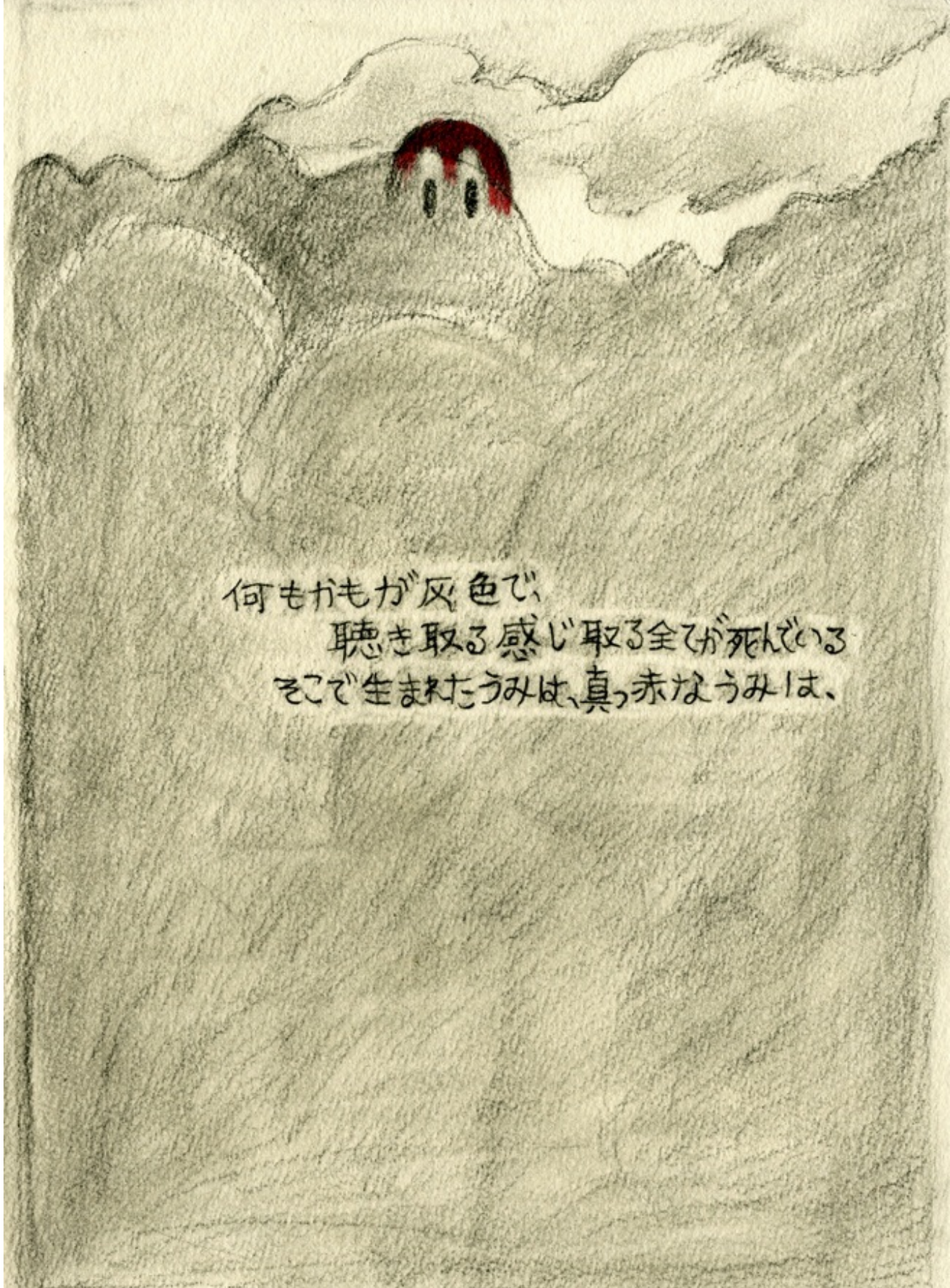
なんでも聴いてくれるとさ。



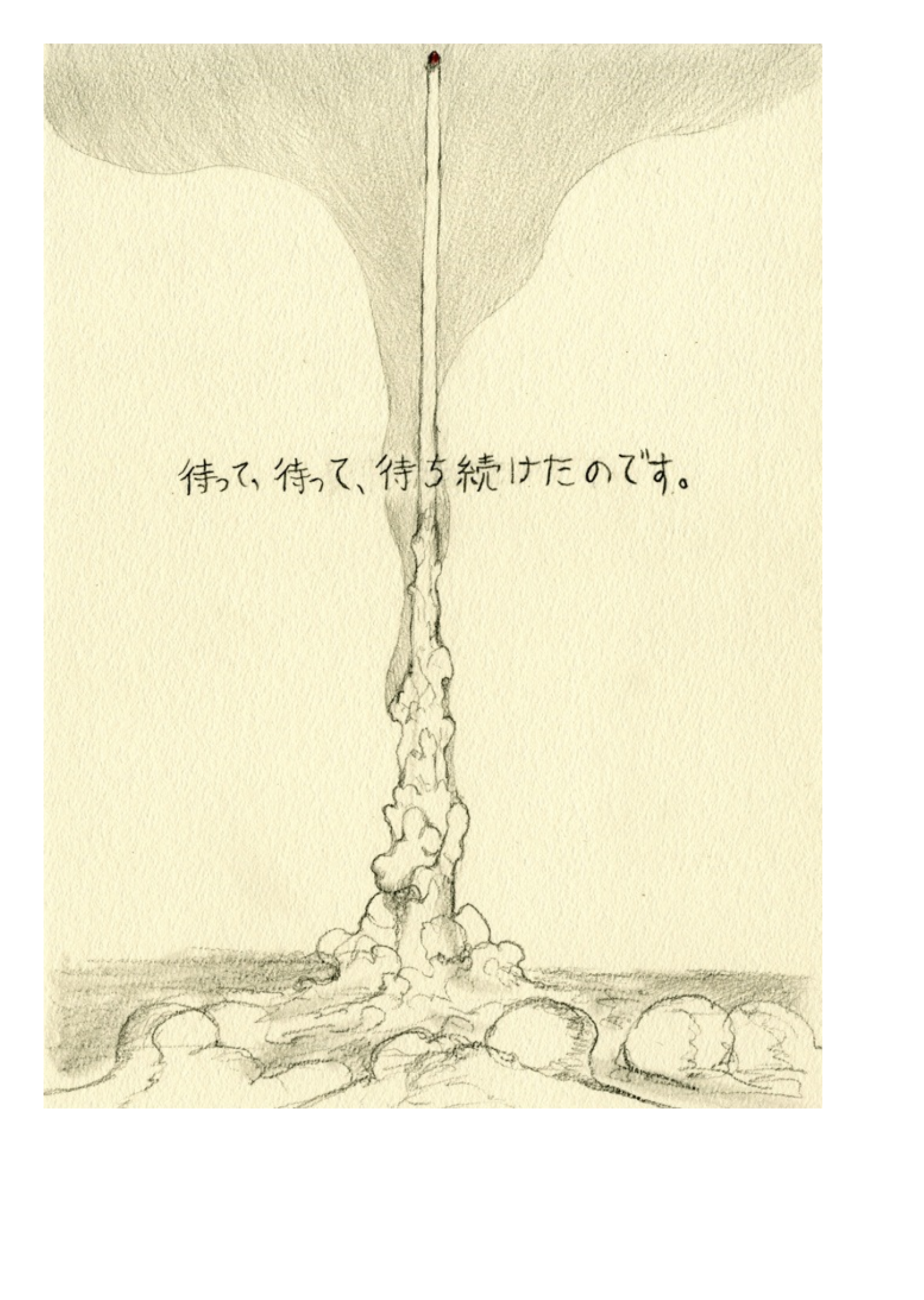
うみものがたり

雲が死んでゆき、
絶壁の塔を成す海
の果てでうみは生まれまた。






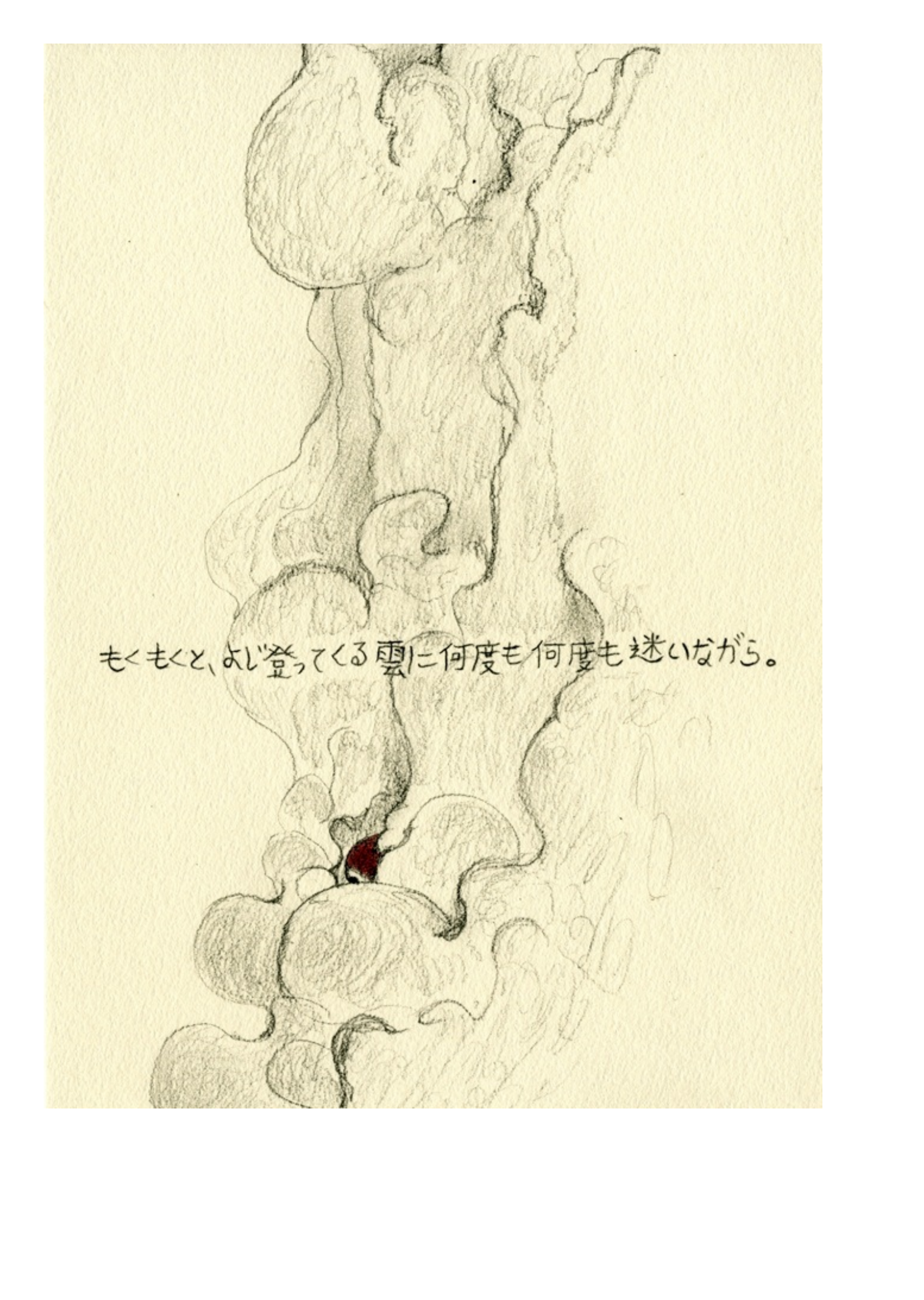
何もかもが灰色で、
聴き取る感じ取る全てが死んでいる
そこで生まれたうみは、真っ赤なうみは、



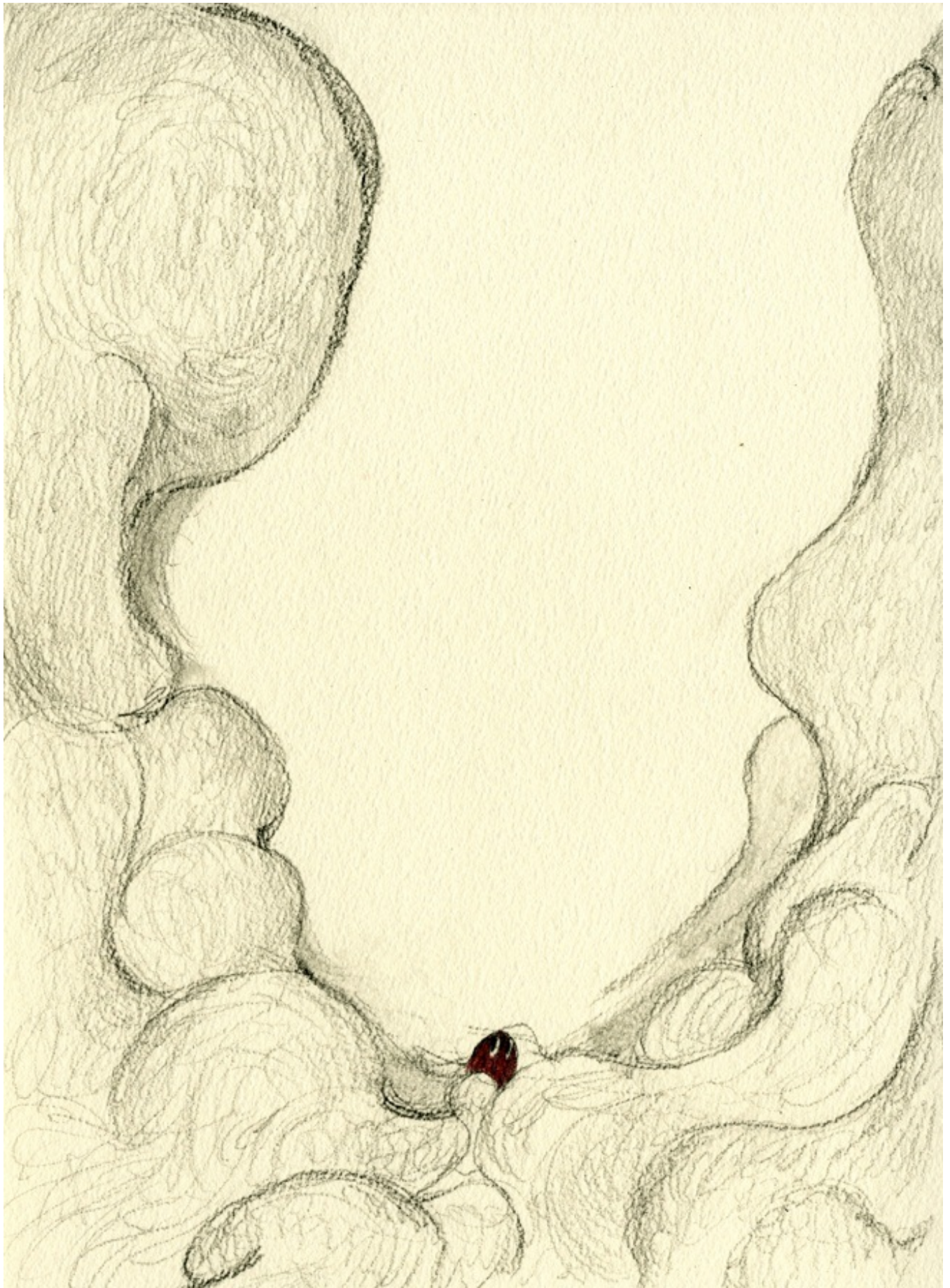
待って、待って、待ち続けたのです。



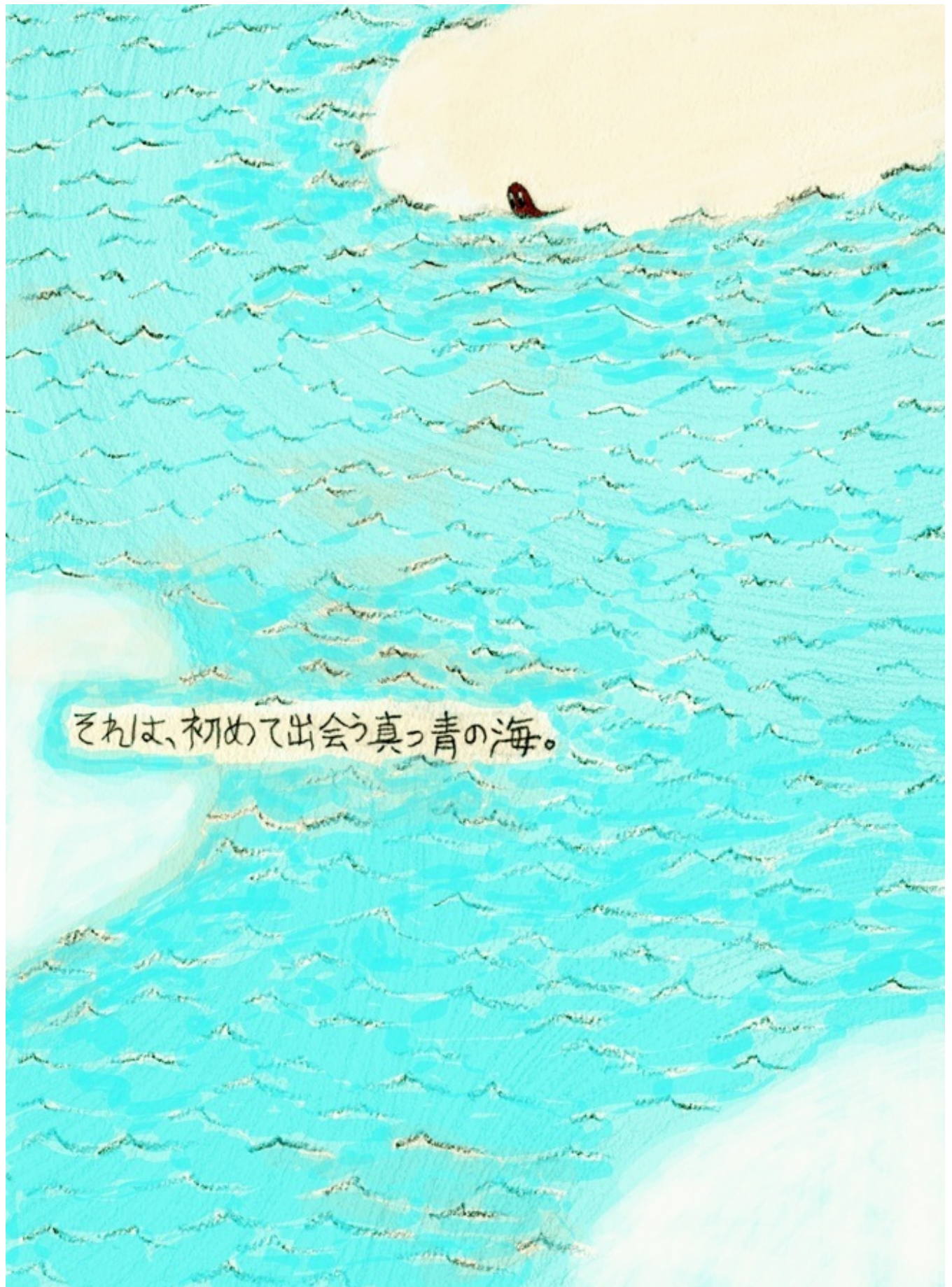
ある日、うみは下り始めました。



もくもくと、よい登ってくる雲に何度も何度も迷いながら。



いったいと"れぐ"らいの時間を泳いだことでしょう。



それは、初めて出会う真っ青の海。

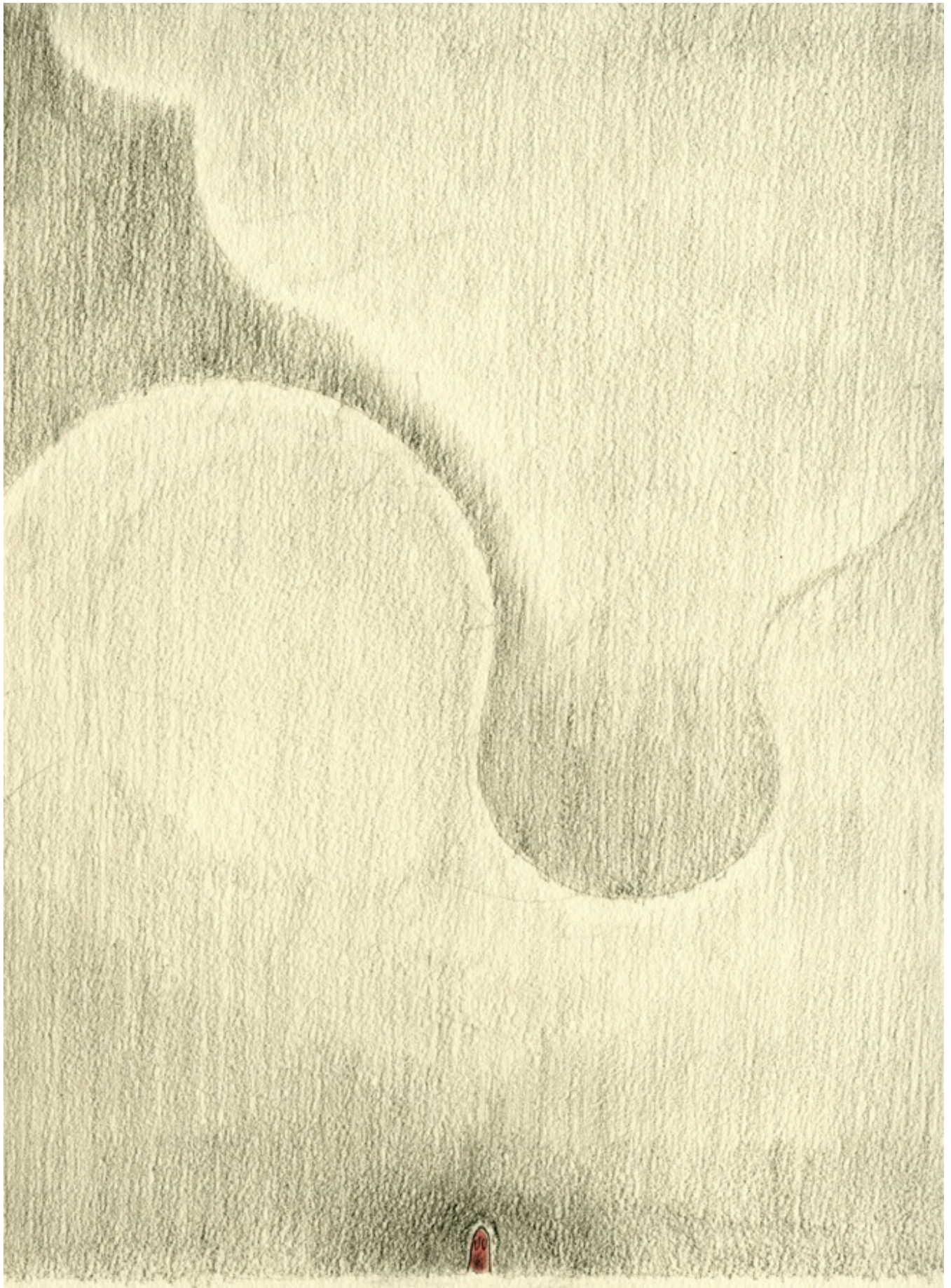
らみはもう海の無いところまで来ました。

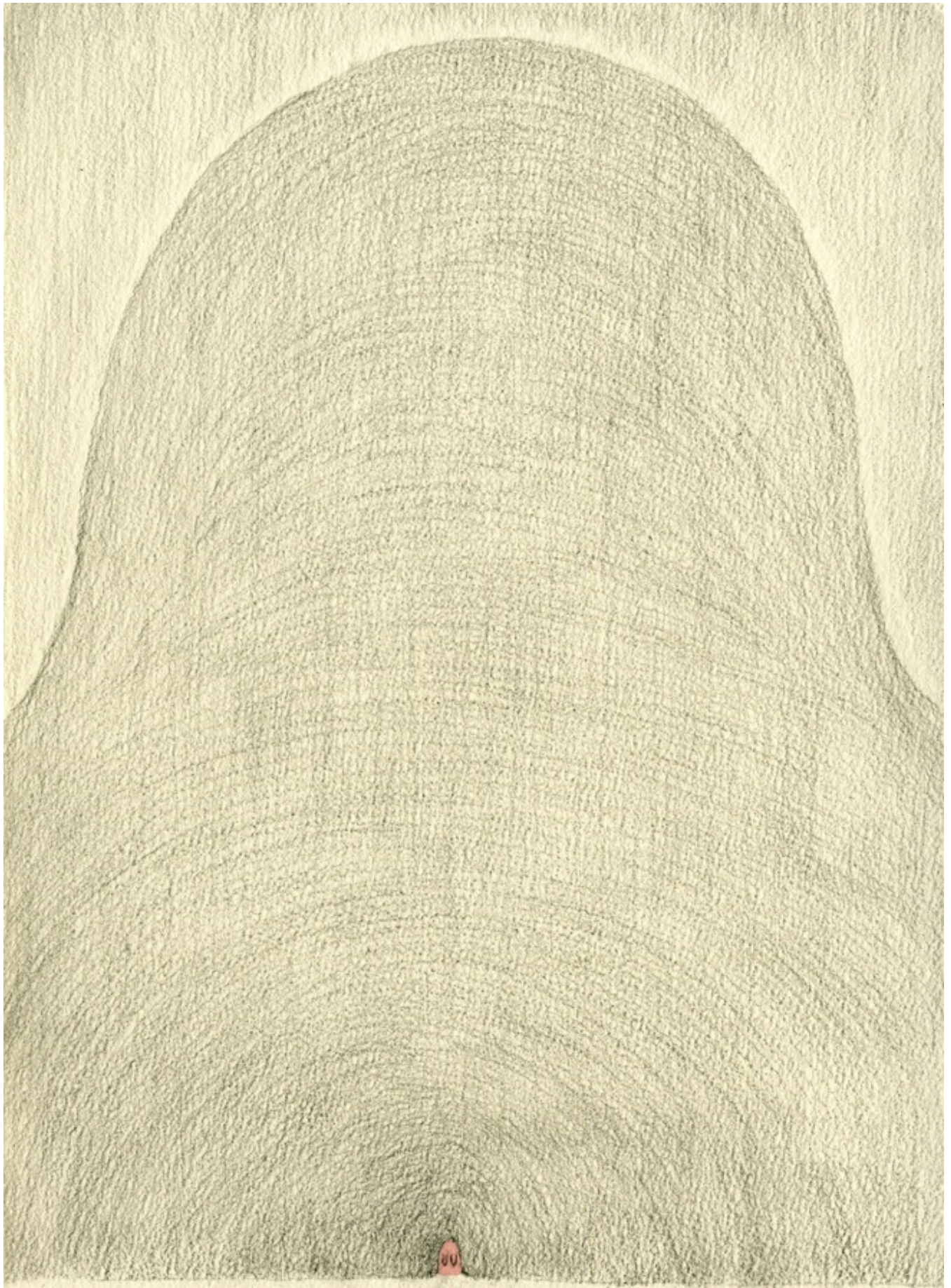


ふっと気づいたらいつの間に、





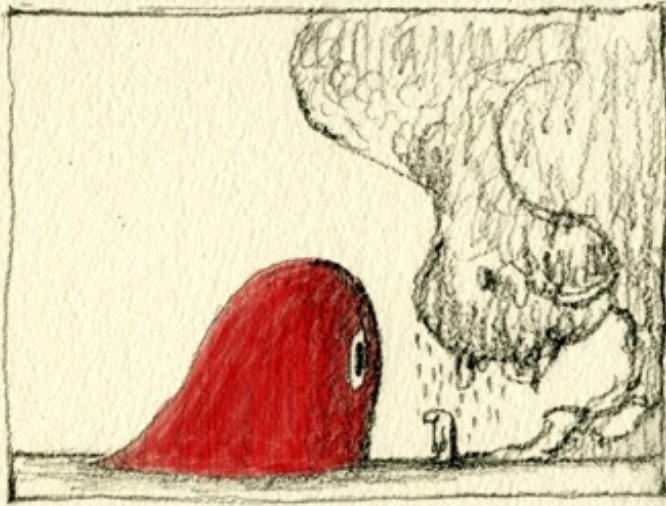




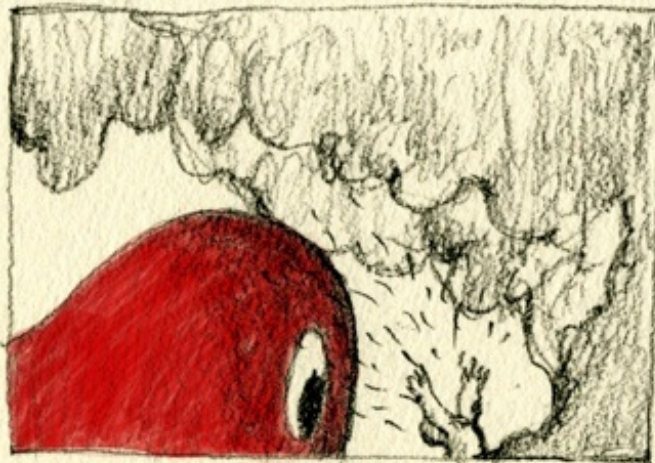
閉じていた目ぶたが暖かくなり

うみが再び目ぶたを開けた時、

そこには、



小さな、

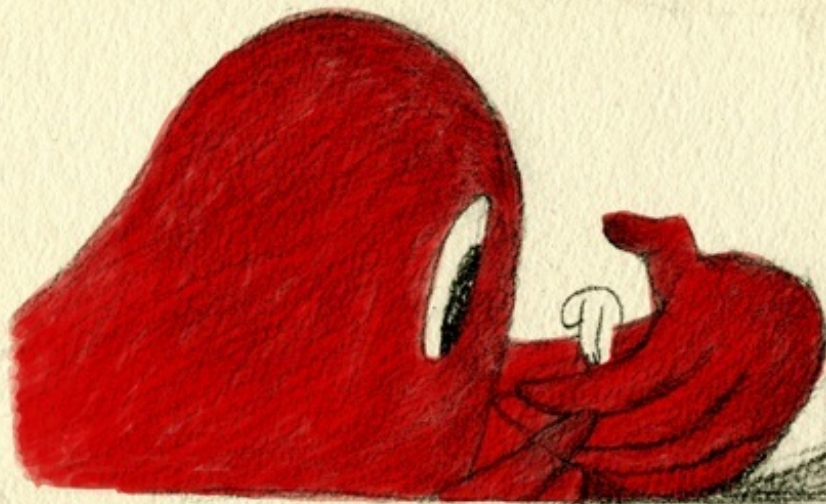


小さな、
身をすくめた人間が。





人間が懸命に叫びかけていた言葉は、



うみには全く分らなかったけれど、

食べはしませんよ。

